「農業体験農園」経営の魅力を冊子（パンフ）で紹介

農園主も入園者も大満足

「農業版カルチャー教室」

京都農業体験農園・園主会

京都農業体験農園・園主会と農業会議は、府内の「農業体験農園」の園主と入園者にアンケート調査を行い、入園者の大半が「野菜の手作り」「園主や利用者同士の交流」で満足と回答。園主も全員が「収入の安定や利用者との交流に満足」と答えた。

そこで園主会は、都市農業の新たな経営手法としてさらに体験農園を普及しようと冊子（写真）を作成、農家に開設を呼びかけている。

冊子は、市民参加型の農業経営としての「農業体験農園」の仕組みと特長を六つのポイントで解説。どんな農家でも開設・運営することが可能、入園料収入と利用者が収穫野菜を購入する仕組みにより安定した収益を実現できる、市民・消費者を呼び込むことで農地を守りながら都市農業への理解を広げられる、などの魅力を伝えている。

京都府立大学の桂明宏教授は「体験農園は農業版カルチャースクールで、園主は野菜の作り方や農の楽しみ方を指導する先生役。やりがいある仕事です」と体験農園を評価する。

コロナ禍で都市住民の生活が見直されるなか注目を集める農業体験農園は、大都市だけでなく地方都市でも増えつつある。府内の体験農園も、京都市だけでなく亀岡市・南丹市など10カ所に広がっている。

園主会では、農業体験農園に興味のある農家からの相談対応や開設支援を随時行っている。

冊子の申し込みや相談の問い合わせは、京都府農業会議（☎075・417・6847）まで。

京丹後市農委会

梅田和男会長 × 竹野酒造

奇跡の酒米「丹亀（たんかめ）の尾（お）」で丹後の地酒を世界に発信

「丹亀の尾」を抱える梅田会長

京丹後市網野町の酒米農家で農業委員会会長の梅田和男さん（62）は、5年前、栽培する「亀の尾」の圃場で芒が赤い個体を発見。翌年から赤芒系統の種子選抜を繰り返し、「亀の尾」に比べて大粒で整粒率が高く穂発芽しない新品種の分離固定に成功した。

梅田会長は「丹亀の尾」（＝丹後で誕生した丹頂鶴のように赤い芒の亀の尾）と命名し、昨年11月に種苗法に基づく品種登録を出願。今年2月に受理された。

市内の竹野酒造㈲（行待佳平代表取締役）は、「亀の尾」と比較した結果、酒造好適米として「丹亀の尾」の方が優れていると確信。今後は、「亀の尾」から「丹亀の尾」に全面移行する計画だ。丹後発祥の酒米で〝丹後オリジナル酒〟を醸す取り組みとして、今冬から「丹亀の尾」を使用した数量限定の清酒「丹穐（にき）」を発売する。

今年の「丹亀の尾」の栽培面積は1・3㌶だったが、来年は梅田会長以外にも生産者を広げ、栽培面積を約5㌶に拡大。将来はさらに生産規模を拡大し、「〝丹後の酒米で醸した丹後の酒〟を世界中に発信していきたい」（行待社長）と構想を練っている。

（京丹後市農業振興課・農業委員会）

竹野酒造が数量限定で醸造する清酒「丹穐（にき）」

コロナ禍の茶・米農家を応援！

市内産の茶ティーバッグ 学校・保育園・特養で配布

米 1袋800円給付

木津川市

木津川市は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けた市内の茶農家・茶業振興では、市内産茶葉（加茂町のかぶせ茶と山城町のてん茶）を使用したティーバッグ（写真）6万5千個を山城茶業組合に委託して作成。市内の保育園、小・中学校、高校、高齢者施設の園児・児童・生徒・入居者・職員に配布。市役所や商業施設でも市民に配布する。

米農家の応援では、2021年産米の買取価格が下落しているため、次期作支援として1袋800円を給付する。11～12月に申請受け付けを行う。

ティーバッグのパッケージ、飲み方紹介は木津川クリエイター部によるデザイン

問屋や米農家を応援するため、新型コロナウイルス感染症対応地方創生臨時交付金を活用した独自事業を進めている。

収入保険 気象災害やコロナ禍の減収を手厚く補償！

茶生産者の加入伸長

21年の加入者469件
対前年比258件増に

9月末現在

NOSAI京都

頻発する気象災害や鳥獣害、コロナ禍の農産物価格下落など減収リスクを手厚く補償する収入保険制度の新規加入者が順調に増えている。京都府農業共済組合によると、2021年の加入者数は前年より258件増え、469件に達した（9月末現在）。

昨年のコロナ禍で大幅な減収となった茶生産者の加入が204件まで伸び、加入者全体の4割を超えている。

和束町と南山城村だけで100件を超える茶生産者が収入保険に加入し、その大半が最高補償（補償限度9割）を選択。今春の凍霜害による減収に対し、保険金を受給できる見込みだ。

保険料補助を創設 新規加入を推進

南山城村

南山城村では、収入保険の新規加入者に対する保険料補助制度（補助率8割、上限7万円）を創設。現在までに村内の茶生産者37経営体が加入している。約5㌶の茶園を経営する農業委員会の中窪耕司会長職務代理は、「今春の凍霜害で2㌶以上の茶園が被害を受けた。周囲にも一番茶を収穫できなかった茶園や収穫時期が遅れて安価な製品になった茶園が多いので、収入保険の必要性を実感した」と話している。

京都府支局
京都府農業会議
京都市上京区出水通油小路東入丁子風呂町104・2 府庁西別館内
075・441・3660

家族総出で葉ボタンを育成

つないで発信

女性委員が〝つないで発信〟

精華町 農業委員・草嶋邦子さん

女性委員３人で仲良く活動している（左から山本委員、藤村委員、草嶋委員）

学研都市の中央部、国立国会図書館関西館に近い畑で葉ボタンや花苗を栽培する女性農業委員の草嶋邦子さん一家。今は、年末の出荷に向けて、葉ボタンの育成の真っ最中です。

葉ボタンは、プラグトレーに播種後、約1カ月で本葉が出たら苗をポットに移します。ポットから畑に移植する際は、1本ずつ穴を掘り、丁寧に植える必要があり、手間がかかります。12月中旬まで、家族総出で忙しい作業が続きます。

草嶋さんが栽培する葉ボタンは、葉の色、艶、形、大きさがさまざまです。大きいものは装飾用、小さいものは寄せ植え用で、寒さが増すと鮮やかに発色し、出荷を迎えます。

葉ボタンが順調に育ち、年末に高値がつくことを祈念しています。

（精華町農業委員会・山本千恵子委員）

農deきらきら

亀岡市 田邊裕樹さん

おいしい九条ネギを届けたい

ネギ苗を植えた田邊さん

亀岡市宮前町で九条ネギを栽培する田邊裕樹さん（31）。大学を卒業後、こと京都㈱に入社してネギ栽培のノウハウを習得し、3年前に独立した。現在、九条ネギを約1㌶で栽培し、こと京都㈱に出荷。安定した経営を行っている。

「自分で植えたネギが成長し、毎日違う姿を見られることが農業の魅力。人とのつながりが広がっていくのもうれしい」と田邊さん。

ネギの一部を知人に販売したところ、「おいしい！」と口コミで購入者が広がっている。

「たくさんの人に自分のネギを届けたい。数年後には法人化し、効率的な農業経営をめざしたい」と目標を語った。

（亀岡市農業委員会）